小京都に見る日本的風景のイメージ

内　田　順　文

1．小京都とは？～隠喩としての小京都

小京都とは、文字通り「小さな京都」つまりは京都のミニ版を意味する言葉であり、京都との類似性からその都市を京都に喩えた隠喩的認識に基づく表現（隠喩）と見なすことができる。この「小京都」という表現は「○○富士」や「××銀座」などと並んで、最も広範に用いられている場所に関する隠喩表現の一つなのだが、同時にここで喩えられている「京都」が、日本の（とくに文化的側面を代表する）シンボルとして見なされていることから、「小京都」という表現によって示されるイメージは、「日本を代表的する文化的な風景（別な言葉で言い換えれば観光地？）」という意味を担わされているものと考えられる。

そこでまず、全国の小京都を取り上げた本や雑誌（全部で20種類）を資料として、これらにどのような都市が小京都として採録されているか、その頻度を数えた結果を地図に示した（図1）。これを見ると、小京都は日本の北から南まで

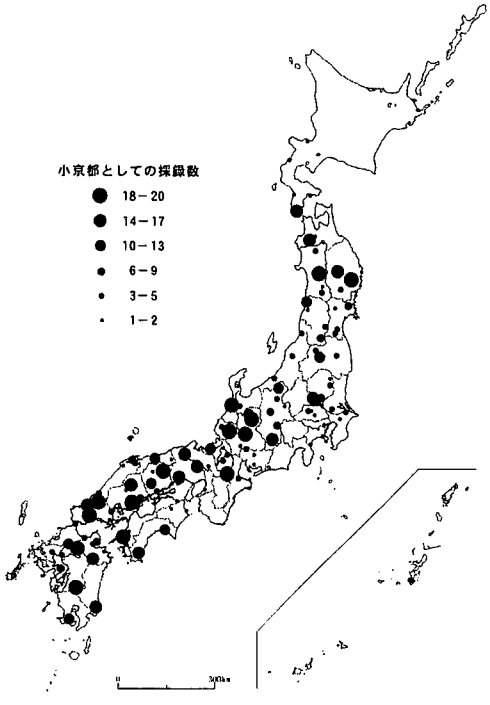

図1　「小京都」の分布

広く分布していること、「小京都」という表現が定着している都市（図中の黒丸が大きい地点）は北陸から中国・四国・九州および北東北に多いことがわかる。

次に小京都の歴史について概観してみると、京都を模して造られた町としての、本来の意味での小京都の発生は、中世末期の室町～戦国時代に遡るとされる。つまり、応仁の乱による都の荒廃の結果、「田舎わたらい」と呼ばれる商人や芸能者の都から地方への下向が盛んになり、地方大名に京都（の伝統的公家文化）に対する文化的劣等感とともに京都への憧憬を抱かせ、その結果として京の模倣すなわち京の隠喩としての小京都を自分の領国内に建設することへとつながったというのである。

こうした典型的な中世の小京都の例として、大内氏によって造られた「西の京」こと周防山口、一条氏の土佐中村、朝倉氏の越前一乗谷、金森氏の飛騨高山などがある。これらの地方都市は、大名が城下町を形成するにあたり、東山や鴨川に比せられる山河のある、京都と共通する土地を選び、碁盤目状の町並みや京風の家屋、祇園社・清水寺などの勧請、京風の地名や習俗・祭礼など、積極的に京都文化の導入を図るなかで、文字通り都（みやこ）を模して造られた。

ただし、京都を模した町が古くから「小京都」という名称で呼ばれていたかは疑問である。実際に「小京都」という言葉が明確に使われはじめるのは近代になってからと思われ、管見では戦前の地誌や旅行案内などの類に「小京都」という名称が稀れに使われているのが最も古い用例である。

これが昭和20～30年代になると、都市の形容に「小京都」が用いられる例が徐々に増え、戦前から小京都とみなされていた高山と山口に続き、津和野・日田・津山・飯田・龍野・人吉・角館・盛岡が小京都と呼ばれはじめており、「小京都」の語が一般に定着しはじめたのはこの頃ではないかと思われる。ただし「小京都」と称される都市の数が飛躍的に増えるのは昭和50年代以後のことで、いわゆる「DISCOVER JAPAN」や「いい日旅立ち」といったキャッチフレーズのもとに地方都市の観光ブームが起こったことと関係している。

つぎに、これら「小京都」に共通するイメージについて考えてみる。筆者が以前行った617市町の観光パンフレット（2000年時点）を定量的に分析した結果によると、さまざまな都市の属性のうち、小京都であることを特徴づけている主要なイメージは、町並・城・川・庭園の4つであることがわかった。この結果、1）それまで小京都のイメージとして挙げられることの多かった寺社の存在や伝統文化の存在については「小京都」の十分条件とはなり得ないこと、2）京都との類似性からは出てこないはずの城の存在が重要な要素として関わっており、「小京都」を規定するのは近世の歴史景観（町並・城・庭園）のイメージであること、の2点が明らかになった。

この分析結果をふまえて、上述の歴史的な分類をもとに、現在「小京都」と呼

ばれている都市を、下記の三つのグループに分類した。

① **京の模倣として建設された都市**

本来の意味での小京都であり、その多くは中世末期に地方の領主が京を手本とした城下町を領国内に建設したことに由来する。山口・中村・一乗谷・高山などが該当する。

② **明治以降あまり発展しなかった地方の近世城下町**

そのイメージは町並・城・川・庭園に代表され、いくつかの都市は1970（昭和45）年頃までに「小京都」と呼ばれはじめていた。現在小京都と呼ばれている都市の多くはこのグループに属する。このグループはさらにa）～c）の三つの下位グループに分類することができる。

a）典型的な小京都

近世に数万石規模の城下町（またはそれに準じる）であった地方の小都市で、1970年頃までに「小京都」と呼ばれはじめていた。大洲・津和野・日田・角館・人吉などが該当する。

b）大藩の城下町

近世に十万石以上を有する大藩の城下町で、明治以降も地域の中心地になっているところが多い。金沢・萩・会津若松・盛岡・松江などが該当する。

c）70年代以降の小京都

近世に数万石規模の城下町であった地方の小都市で、1970年代以降の地方観光ブームに伴って「小京都」と呼ばれはじめた。出石・大野・竹田・飫肥・秋月などが該当する。

③ **古い景観を残している地方の小都市**

伝統的町並を中心に、のどかな自然環境によって構成された歴史都市(近世城下町とは限らない)で、1970年代以降の地方観光ブームに伴って「小京都」と呼ばれはじめたもの。安芸・竹原・遠野・知覧などが該当する。

次章では、上記の五つのグループからそれぞれ1カ所ずつ「小京都」を取り上げ、その景観(風景)とともに紹介する。

2．小京都の風景とイメージ

1）山口：本来の意味での小京都

山口は、1364（正平19）年、将軍義詮に謁見するため初めて上洛した防長二国の守護大内弘世が京の風物に魅せられ、帰国後地形的に京とよく似た山口の地に新しく街を造り、居城として定めたことに始まる。以後、中国地方の有力守護大名大内氏の居城として、7代にわたり京風化の努力は続けられ、足利10代将

軍義稙、雪舟、ザビエル等が山口を訪れた。1551（天文20）年、陶隆房の謀反により山口は灰燼に帰し、毛利氏支配下では山口奉行が設置され、さらに関ヶ原合戦後、毛利氏の本拠が萩へ移った結果、大内氏時代の遺構の多くは失われた。幕末、長州藩が藩庁を山口へ移動して再び政治中心になり、廃藩置県で山口県の県庁所在地となった。

大内氏館跡は、大内弘世が山口を本拠と定め移り住んだ時に居館として築かれたもので、大内氏滅亡後、毛利隆元によって大内義隆の菩提を弔うために龍福寺が建てられた（写真１）。また、大内氏館跡のそばにある竪小路は、かつての「西の京」に由来する古くからの通りで、古い街並みが点在する（写真２）。町の中心には大内弘世が京の鴨川になぞらえた一の坂川が流れ（写真３）、同じく大内弘世が京都から勧請した八坂神社と古熊神社（北野天神）も今に残る。ほかに、1399（応永6）年戦死した大内義弘の菩提を弔うため、香積寺に造営された瑠璃光寺五重塔や、大内政弘が別荘として、画僧雪舟に築庭させたものと伝わる常栄寺雪舟庭園（写真４）などが見られる。

現在の山口は、山口県の県庁所在地ながら人口では県下第２位（19万４千人）の都市であり、日本で最も「県都らしくない」県庁所在地として、また新幹線が直接通らない県都として、ひっそりと落ち着いたたたずまいを見せている。

写真１　大内氏館跡

写真２　竪小路

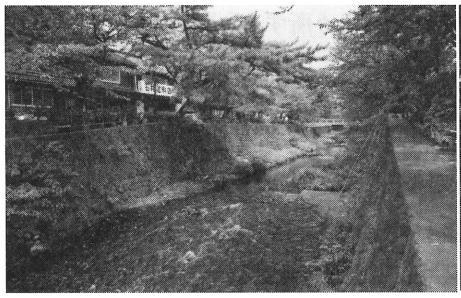

写真３　一の坂川

写真４　常栄寺雪舟庭園

2）角館：地方の近世城下町ー典型的な小京都

角館は、1424（応永31）年戸沢氏が角館城へ移って後、戸沢氏の本拠となったことに始まる。1602（慶長7）年、戸沢氏に代わり、芦名義広が佐竹氏家臣として1万6千石で入封、城下町を形成したが、1615（元和元）年、一国一城令により角館城が廃城となり、城主芦名氏は麓の屋敷へ移った。1656（明暦2）年、芦名氏が断絶したため、佐竹氏の分家佐竹北家の義隣が入部、以後明治まで11代つづいた。明治初年の戊辰戦争では藩内各地が戦場となったが、角館は戦禍をまぬかれた。角館は藩政時代を通じて仙北郡の政治経済の中心地であったが、1871（明治4）年の廃藩置県以降はその地位を喪失し、郡の中心地は大曲へ移った。

角館の町並みは旧武家町のほぼ中央にあり、上・中級武士の武家屋敷にあたる。広い通り沿いに塀が連続し、シダレザクラやモミの大木が深い木立を形成し、江戸時代末期時の屋敷割や主屋・門・倉の屋敷構え、枡型など武家町の特性をよく残している（写真5）。昭和51年に重要伝統的建造物群保存地区に選定され、武家屋敷のうち青柳家、石黒家、松本家、岩橋家、河原田家などが公開されている（写真6）。武家町の西方には蔵と商家：慶長年間からの酒造家で豪商の「五井家」、明治43年建築の「坂本家」、下新町の「安藤味噌醤油醸造元」などが残る（写真7）。桧木内川堤の染井吉野は1934（昭和9）年に今上天皇御誕生記念として植えられたもので、春には2キロメートルに及ぶ花のトンネルを形作る（写真8）。

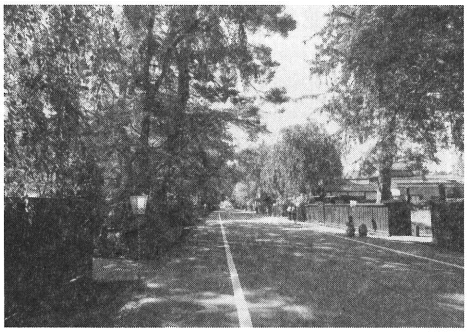

写真5　角館の町並み

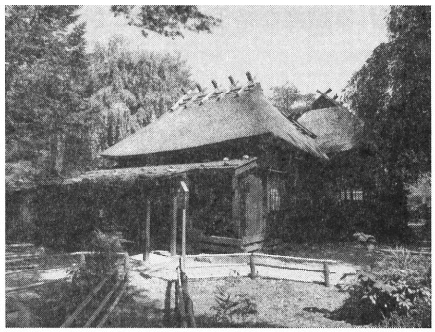

写真6　武家屋敷

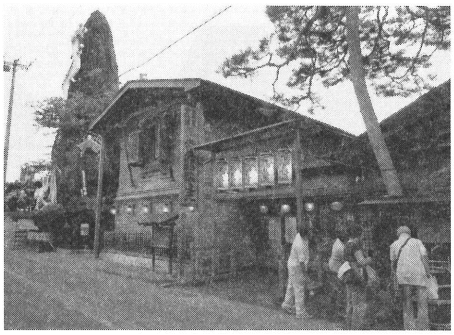

写真7　蔵と商家

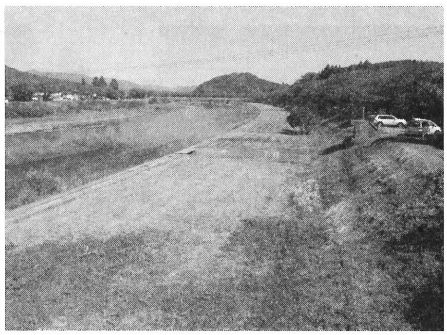

写真8　桧木内川堤と古城山

3）金沢：地方の近世城下町－大藩の城下町

金沢は、1546（天文15）年本願寺（一向宗）の支配下、金沢御堂（尾山御坊）が建てられたことに始まり、1583（天正11）年前田利家が秀吉より加賀2郡を加増され七尾城から金沢城へ入城した。1600（慶長6）年、関ヶ原の戦いで初代前田利長は東軍につき、120万石余の所領を獲得し、その後102万5千石の城下町として明治まで続いた。1871（明治4）年の廃藩置県によって金沢県となり、その後旧3国を合わせた石川県の県庁所在地となり、北陸地方の中心都市として今日にいたる。

金沢城址は戦前陸軍第9師団司令部が置かれ、戦後は平成7年まで金沢大学のキャンパスとして利用されたが、現在は金沢城公園として整備・公開されている（写真9）。兼六園は五代藩主前田綱紀が造った蓮池庭を、代々の藩主が広大な庭園として整備したもので、日本三名園の一つとして知られる（写真10）。また、前田利家が城下町を整備するにあたり、一向一揆対策として寺院を金沢城南西の犀川左岸台地上・東の卯辰山・南東の小立野台地上の3カ所に集めたものが、現在の寺町寺院群・卯辰山山麓寺院群・小立野寺院群として重伝建地区に指定されている。長町武家屋敷跡は加賀藩の中級武士が住んでいた界隈で、土塀や長屋門が続く細い通りや鞍月用水・大野庄用水の流れが江戸時代の風情を感じさせる（写真11）。ひがし茶屋町は金沢で最も格式の高い茶屋街で、木虫籠（キムスコ）と呼ばれる繊細な格子がほどこされたお茶屋の建物が並ぶ（写真12）。

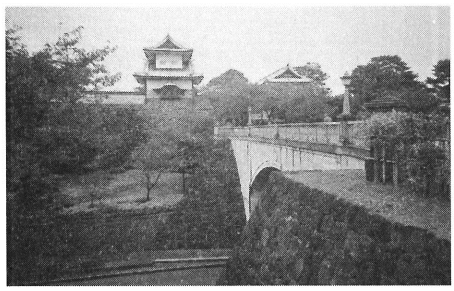

写真9　金沢城址

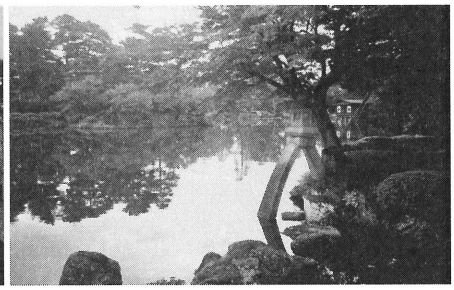

写真10　兼六園

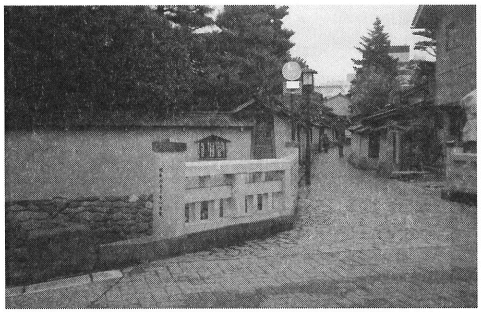

写真11　長町武家屋敷跡

写真12　ひがし茶屋町

4）竹田：地方の近世城下町－1970年代以降の「小京都」

竹田は、14世紀に大友氏の一族の志賀氏が城を整備し、岡城と名付けたことに始まる。1593（文禄２）年大友吉統は秀吉によって所領を没収され、翌年中川秀成が５万石で岡城へ入封し、岡城を修築して城下町である竹田を整備した。秀成は関ヶ原の戦いにおいて東軍に属したことで、家康より所領を安堵、明治まで中川氏13代が竹田を支配した。廃藩置県により岡県となり、その後大分県に編入された。

岡城址は明治の廃城令によって廃城とされ、城内の建物は全て破却されたため、現在は石垣のみが残る（写真13）。瀧廉太郎は幼少期を竹田で過ごしており、岡城から「荒城の月」のイメージを得たと言われ、城跡に銅像が建っている。殿町武家屋敷（写真14）にはかつての家老など上級武士の屋敷が多く残り、付近にはわが国を代表する南画家田能村竹田の旧居である旧竹田荘（写真15）もある。廣瀬神社は明治37年日露戦争で戦死した廣瀬中佐を祀った神社で、瀧廉太郎記念館は瀧廉太郎が12歳から14歳まで過ごした居宅の一部を記念館として公開したものである。竹田は現在人口１万７千人の小都市で、「荒城の月」で知られる岡城址に天守閣は現存しないし、再建されてもいない。

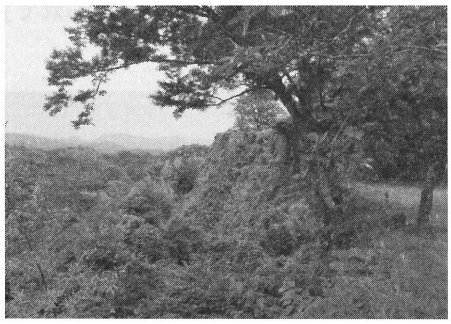

写真13　岡城址

写真14　殿町武家屋敷

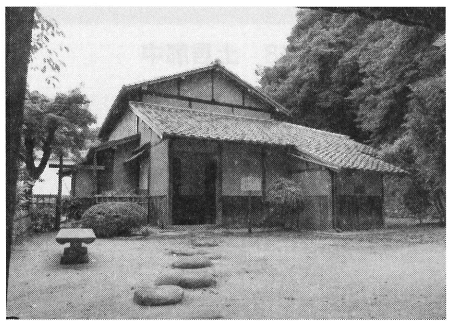

写真15　旧竹田荘

写真16　瀧廉太郎記念館

5）安芸：古い景観を残している地方の小都市

安芸は、1309（延慶２）年、安芸親氏が安芸城を築城、居城としたことに始まり、1569（永禄12）年長宗我部元親の弟香宗我部親泰が安芸城に入城、安喜城と改められた。1600（慶長９）年、山内一豊が土佐一国を与えられると、重臣の五藤為重に1100石を与えて安芸郡に配した。為重は安喜城を居城としたが、1615（元和元）年の一国一城令により、安喜城を土居と称した。以後、明治まで「安芸（安喜）土居」として五藤氏が居住し、土居の周囲には家臣団の武家屋敷が整えられた。1889（明治22）年町村制施行により安芸村に、1895年安芸町となり、1954年周囲の村と合併し市制施行した。

安芸城跡は、かつての安芸氏の居城跡であり、江戸時代以降は土佐藩家老の五藤氏が居住していた（写真17）。土居廓中は土佐藩家老五藤氏の家臣が屋敷を拝領して住んだところで、いまも昔のままの町並みを残している（写真18）。野良時計は安芸市のシンボルともいえる櫓時計で、明治30年頃に地主の畠中源馬が独力で研究し、部品をはじめすべて手作りで完成させたものである（写真19）。岩崎弥太郎生家は三菱財閥の創始者の生家で、安芸市街の外れにある（写真20）。また、安芸は大正・昭和期の代表的な作曲家の一人である弘田龍太郎の生地でもあり、代表作である「浜千鳥」「雨」「鯉のぼり」「春よ来い」「叱られて」などの曲碑が市内各所に建つ。

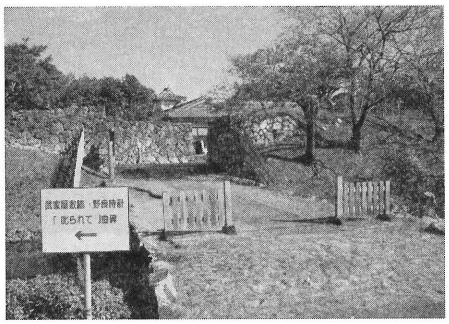

写真17　安芸城跡

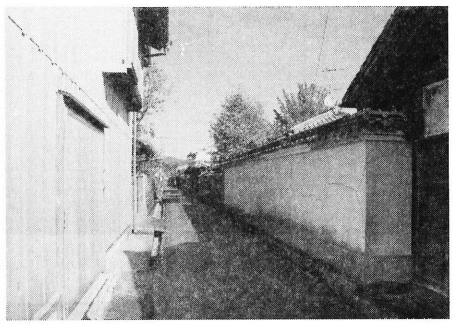

写真18　土居廓中

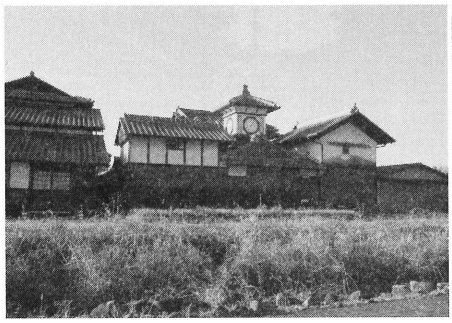

写真19　野良時計

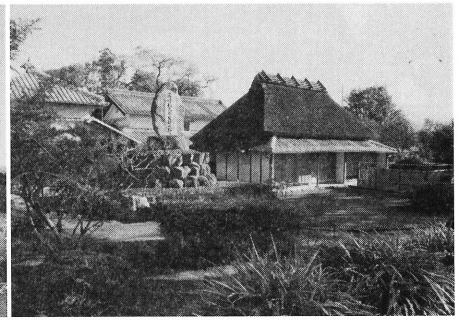

写真20　岩崎弥太郎生家

3．結論：小京都のイメージ～日本的風景のイメージ

以上、五つの「小京都」の景観を簡単に見たが、おそらく「小京都」という何となく華やいだ名称から連想されるイメージが「派手で華麗な観光地」であるのに対し、現在「小京都」と呼ばれている都市のイメージは、むしろその逆のイメージに近かったのではなかろうか。じっさい以前筆者が「小京都」と呼ばれている都市の観光パンフレットを分析した際に、そこに共通して記載されたイメージとして抽出されたものは、「過去＝静寂」、「時が止まる＝別世界」、「懐かしい＝ふるさと」といったイメージだった。いずれも「現代の都市らしくない」都市のイメージ、つまり「反都市的」な都市のイメージであり、都市としてはむしろネガティヴなイメージであることがわかる。

これは別の見方をすると、「高度経済成長期において都市化や工業化といった現代化に取り残された都市」のイメージであり、現代化に取り残されたがゆえに、これらの街には江戸・明治・大正・昭和といった古い時代の遺物が、老朽化しながらも新しいモノに建て替わることなく、文字通り消極的（ネガティヴ）にかろうじて残されていた、そういう地方の「開発から取り残されていた都市」が1970年代後半以降、石油ショックを経ていわゆる経済高度成長が終わり、歴史を否定し自然を破壊する都市的なものより自然的なものや歴史的なものに価値を再発見する風潮が高まるとともに、「小京都」という言葉で喩えられる鄙びた都市のイメージに、新たに観光資源としての価値が与えられることになったと考えられる。

それにしても、このような都市のイメージの比喩が、なぜ「京都」の比喩になるのだろうか。翻ってみると、京都は平安時代～室町時代に日本の政治・経済・文化の中心でありつづけ、また戦国期～江戸時代にも少なくとも日本の文化の中心であったにもかかわらず、近代以降は政治・経済・文化のいずれにおいてももはや日本の中心ではなくなったことから、京都は「日本の文化的な象徴」であると同時に、「過去の栄光」と「現代の没落」の象徴でもあったことがわかる。こうして、本来は京都との類似性がほとんどない（したがって厳密には京都の隠喩とはなり得ない）歴史都市（その多くは旧城下町）のうち高度成長に取り残されたものが、小京都という隠喩のイメージを利用しはじめ、やがて小京都の「反都市的」イメージは拡大解釈されて、むしろ「農村的」と呼ぶにふさわしいような地方都市にまで広がっていったのではないか、と考えられる。これは、その都市のイメージ（＝風景）が、都会の日常生活のそれから離れているほど魅力的な観光地となるという現象として理解することも可能だろう。

このように解釈すると、津和野・角館・出石・秋月・飫肥などは近代以降あらゆる意味で実際に衰退した都市であるし、弘前・伊賀上野・津山・萩・会津若松・

日田・人吉などはその後県庁所在地になることなく停滞した都市であり、金沢・盛岡・松江は現在も県庁所在地だが、近世には現在よりもっと華やかな都市だったという点で、やはり同様の共通したイメージを持っている。したがって、名称からしてまさしく京都の隠喩である東京や、同じ地方の旧城下町でも近世以降さらに発展した仙台・名古屋・広島・福岡・熊本などが小京都と呼ばれることがないのは当然であるし、また一方で「過去の栄光」と「現代の没落」があるからといって、夕張・室蘭・釜石・いわき・飯塚・田川など、戦後衰退した鉱工業都市が小京都と呼ばれることもないのである。

本論のはじめに述べたように、「小京都」という表現によって示されるイメージは、「日本を代表的する（文化的な）風景」という意味を、同時に担わされているのであった。したがって「小京都」によって示されるイメージは、今日では「日本的な風景」という意味をも与えられていることになる。これをまとめると、現在我々が日常用いている「日本的な風景」が意味するイメージとは「過去」や「ふるさと」に象徴される「反都市的」なイメージであり、それは今日の日本においては、「非日常」の空間を意味すると言い換えることもできる。すなわち「日本的な風景」とは、「過去」のイメージ、さらに強く言えば「現実には存在しない場所」のイメージに近いのではないかと思われる。